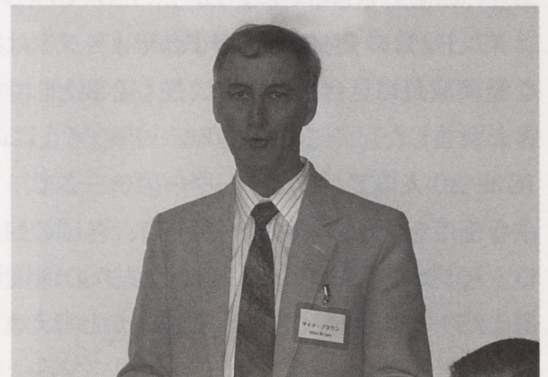


ICハウス誕生、オープニングパーティー開かれる

世田谷の閑静な住宅街の真中に、ICハウス兼事務所が誕生した。築50年を経た邸宅で、緑濃い庭も備えている。11月19日(日)オープニング記念パーティには、50人余りの方々が集い、またインドより来日したマイク・ブラウン夫妻(IC専従、オーストラリア/イギリス)が記念の講演を行い、これからのIC拠点としてのハウスに寄せる期待を語り合い、ICにとっての新しい出発の時を迎えた。



●講演するマイク・ブラウン氏

アジアにおける日本の役割 マイク・ブラウン夫妻記念講演

私達は2ヶ月間アジアの5カ国(ベトナム、カンボジア、インドネシア、韓国、日本)を回り、夫々の国でフレッシュな確信を持った活動や新しいチームの存在を知り、前進する動きを見て来ました。これからはアジアが世界をリードすると言うことは、世界中の誰もが疑いません。アジアの経済発展、それは日本の戦後の飛躍的な復興に始まり、アジアの「トラ」中国に影響を与え、今や二つの巨大な国々、中国とインドは、世界中のあらゆる市場を魅きつけています。

同じようにICの立場にあっても、既に大きく発展する鼓動が感じられます。私達はまさに取り掛かったばかりで、アジアでのこの挑戦の可能性は今始まりました。インドの経済人2名、そして政府の高官であった

計3人の友人達が、去る5月に来日しましたが、日本ICとインドのICが共催で国際会議を開くことが決まったことをとても喜んでいました。日本のICとインドのICが手を取り合い、倫理にかなったやり方、企業の社会的責任(CSR)、そして環境の保全に配慮しながら経済力を高めたいと求めているアジアの政府や経済界の賢明なリーダーを見出し支援していくことができるでしょうか?

又、世界の将来にとっての日本と中国の関係の重要性を疑う人はいないでしょう。両国が東アジア地域において覇権を競うのではなく、未来に向けて、過去の傷を癒し、民主的で、正直で社会正義を備え、人類全体の文明を前進させるために協力できないでしょうか?

■主な内容

◇新しいICハウスのオープン	1-3	◇第3回訪中レポート	7-8
◇私の日本日記	3-4	◇コー世界大会に参加して	9-10
◇第3回日中韓学生フォーラム	5-7	◇ICニュース	11-12

私達は日本のICの方々が、長年にわたり中国、そして韓国との信頼関係を作ってくれたことに深い尊敬の念を覚えています。またスイスのコーや、イギリス、ノルウェーのICのチームも中国の方々と友好を結んでいます。また、アクション・フォー・ライフの若いグループも中国への訪問を重ねています。丁度、台湾のリューレンジョーさんが、上海アカデミーに招かれ、講演をする事になったと聞きました。世界の国々との対話と信頼作りを求めている中国の方々に、人間関係や価値観に変化をもたらすICの真髄を紹介する上でも、日本の力が世界で求められています。どうしたらもっと上手くお互いに協力できるでしょうか？

インドICの会長イラルー氏が、「アジアはその急激な経済成長に見合う良心の成長も必要としている」と言われました。そこで、イラルー氏の考えにのっとり、10～20人のアジアのリーダーのチームで、アジアの主な都市を2～3週間かけて回り、各国の政府やNGO、ビジネスリーダー達に会い、夫々の地域の良心を備えたリーダーを見出せないだろうかと考えました。例

えば、東京に始まり上海、ジャカルタ、バンコック、クアラルンプールそして最後にニューデリーという風にです。「アジアの良心」として存在し、問いかける核となりうる、リーダーたちのネットワークを作ることを目指します。そしてそれをこの成長を続けているアジアのICのチームがサポートしてはどうでしょうか？もし、このようなアジア全域を網羅する大胆なイニシアティブの発動に日本の方々の力を貸して頂けるのであれば、私自身も力を尽くす覚悟です。

私達の人数は多くはありません。しかも、歴史と国のプライド、政治と経済の力は強力です。

しかし、私たちは精神的、道徳的な力で人々と社会の中に効果的に変革をもたらしてきたという経験の自信を持ち、そして私達を超えた神聖な力が在ることをも知っています。私達ICファミリーは、今こそ、私達の心と、人生と、資質の全てをもって、この地域の将来を形作るためのそれぞれの役割を果たす決意ができるでしょうか？

(ICハウスオープニングパーティーでの講演より抜粋)

ICハウス誕生秘話

高橋 久子

ICハウスは小田急線千歳船橋駅より、徒歩7分の閑静な住宅街にあります。築約50年を経た邸宅は、がっしりとした木造、当時としては珍しく山小屋風の大屋根の作りです。白壁にこげ茶色の太い柱が配された瓦葺の家に、松と楓の大木が庭の左右に配され、美しい庭のたたずまいをかもし出しています。門の脇には父の故郷高知から取り寄せて植えた、山桜が大木になってそびえています。

この邸宅は私の父、片岡義信が建てたもので、当時新進気鋭の建築家佐藤秀氏の手で設計され、庭は母の弟で当時はまだ駆け出しだった造園家、中島健の設計によります。家は昭和33年に建てられ、その前下北沢の国鉄官舎に住んでいた私達家族8人(父母、兄妹5人それぞれにお手伝いさん)が移り住みました。

父は高知県の佐川からさらに山奥に入った片田舎から上京し、苦学しながら帝国大学(現東京大学)を卒業、当時の鉄道省に入省して国鉄一筋に理事までの道を全



●様々な会合で使われるようになったICハウスで、家庭的な雰囲気が好評

うしました。戦後直に経済使節団の一員として、ヨーロッパ、アメリカの労働事情、経済事情を視察した際にMRA(現IC)に出会い、四つの絶対標準(正直、純潔、無私、愛)により、良心の声に従って生きることを教えられました。帰国するとすぐにそれを実行し、大酒飲みだった父は禁酒、禁煙を宣言して、母にそれまで家

庭を顧みなかったことを謝りました。このことで、暗かった母は急に明るく輝く人となり、私達子供達にも優しく笑いかけるようになりました。父は職場でもMRAの精神で生き、全国で折りある毎に国鉄職員の前で、「人の安全を預かる仕事につくものは、心を平静に保たなければならない。それには家族を大切にして、家庭円満を計りなさい」と話していたそうです。自分の周りの秘書に対しても働きやすいように気配りをし、また労働組合に対しても対話を図るなど、努力を惜しまなかった事が父の著書に記されています。

MRAの種々の活動にも参加し、「ボス」と言う劇では主人公を演じ、当時の鳩山首相官邸内でも公演し、政界の要人が観劇したという話も残っています。当時住んでいた世田谷下北沢の官舎には、外国から青年達が滞在するようになり、彼らが子供の私達を一人前に扱ってくれることに驚き、印象深く心に残っています。その後、公務を終え官舎を出ることになった父は、初めて自分の家をもつ事になりました。千歳船橋の地を選び、大邸宅ではありませんが、狭いながらも多くの人が集う事の出来る家として、設計を依頼しました。父と母の希望を入れて、座敷とリビングをオープンにすると、30畳程の広さを取れるようにうまく設計されています。襖を閉じれば座敷や奥の茶室風の四畳半にも、泊まれるようになっています。外国からもよくお客様が

訪れていました。ところが父は家を建てて、4年も経たないうちに突然心筋梗塞のため他界（1962年、享年56歳）、まだこれからという時でした。父の死の知らせを受けて、真っ先に駆けつけた当時の国鉄の十河総裁が、父の身体をゆさぶって号泣した姿は、今も瞼に焼きついています。その後10年して母も他界、兄が長年海外勤務でカナダやアメリカに駐在していた関係で、次々と色々な人が住むようになりました。それでも佇まいは依然変わらず、建ち続けるこの家を壊す事は出来ずに、誰かが順に住み続けて守って来ていましたが、いよいよどうしようと言う時にある日突然私の心の中に、ICハウスとしたらどうだろうと言う考えが浮かびました。兄夫妻も家族も皆がこの考えに賛成してくれ、掃除や片付けなど協力してくれました。ICハウスとしてオープンし、父や母を知る方々が来訪し、「片岡夫妻の心を、信念をこの家の中に感じる」と語るのを聞き、初めて私にもこの家の価値が見えてきました。これからのICの拠点として使われ、多くの人の心の拠り所となれば、父や母にとってもこんな嬉しい事はないでしょう。小さい時から父や母の心を自然に受け継いで来た私にとって、自分の若き日を過ごした家で、若い人達が交流し育っていく姿を見ることは、この上ない喜びと感じています。



●緑が安らぎを与えてくれるICハウスの庭

私の日本日記

韓国・水原大学 4年 チェ・ヒジン

高校時代に日本文化に興味があった兄を通じて日本について知りました。私にとって日本という国は歴史、文化などが似通っているのにとっても違う国、近くて遠い国でした。大学3年が終わってから日本に来る時、「心配しないで。大丈夫!」という言葉自分を繰り返しました。韓国ではいつも甘えられる末っ子で、いつも相談に乗ってくれる家族と友達が側にいてくれましたが、日本ではたった一人でした。最初の3ヶ月は日本語の勉強ではなく社会勉強でした。一つ目のバイトは長い時間でとても疲れるし、手が足りなくて休みを取ることもなかなか出来ませんでした。日本に来る時、日本を、日本人を、日本の文化を一番早く教えてもらえる所は、韓国人の多い日本語学校ではなく“普通場所”のバイト先だと思いました。ところが私は働くためだけに日本に来たと思われるくらい働いていたので、うまくいきませんでした。二つ目のバイトは和食レストランでした。毎日「意味が分からない。そんなに日本語が下手なら韓国に戻れ!」とひどく言われましたが、日本語を上手に出来ない自分に怒ることしか出来ませんでした。

丁度その頃、“第2回韓・中・日フォーラム”で出会った長野清志さんが、IC事務所で一緒に働くよう提案してくれました。2006年10月からICで働くことになり、私はいろいろ変わりました。毎日約1時間の昼ご飯の時間には、長野さんと楽しい会話が十分できました。さらに言葉と行動が一致している長野さんの姿を見て、とても感動して私も少しでも正直な人になりたいと思い、毎日「静かな時間」を持って頑張り始めました。実は子供の頃から英語の勉強と、他の国での体験のため外国に行ってみたくて思っていました。世界のあちこちを旅しながら自分の目で見たり、自分の身で経験したりしたいと思ったのに、韓国では私の夢を理解してくれる人がいませんでした。「無駄な事を考えるな」と皆現実に追われて私を応援してくれる余裕がありませんでした。ところが長野さんは間違えた日本語を直してくれたように、私に夢に向かって歩き始める道を教えてくれました。



●後列向かって左から二人目がチェ・ヒジンさん（前列はマイク・ブラウンご夫妻（左右）と高橋久子さん（中央）。

それから私がICに感謝していることは、私の日本の両親、高橋夫妻と合わせてくれたことです。一生忘れないでしょう。昨年6月“第3回韓中日フォーラム”の準備会を手伝った時に出会った高橋久さんの家に住むことになり、そこは私にとって“第2の故郷”になり良い思い出となりました。私の事を考えてくれる家族がそばにいる、私が疲れたら慰めてくれる、私の事を聞いてくれる人達がいるだけでも、私はいつも救われました。

そして高橋さんの話が私の胸に、何か知らない力を生み出し、私の夢を応援してくれました。またいろいろ忠告してくれました。「誰が正しいかではなく何が正しいかが大事な事」という高橋さんの言葉は、大事な事を見逃していた私に、いろいろ教えてくれました。本当に心から感動して、私は自分の間違えた考え方を反省しました。彼女の話は今も私の心に残っています。正しい考え方を実践して、子供さんやお孫さんが正しい事を自然に分かるような生活をしている彼女の姿を見て、将来母になる自分がどのくらい大切な役になるのかを、深く感じました。まず自分自身に自信の持てる正しい考え方が必要だと感じました。そのようにだんだん私の心は開いていきました。他人のために待つとあきらめる事、他人の立場で考えてみる事、自分が与えられただけ返してあげる事など、日本に来て習った他への暖かい思いやりを忘れないように、もっと努力して行きたいです。

日中韓学生フォーラム

第3回東北アジア青年フォーラムが、2006年8月24日(木)～8月29日(火)の日程で、韓国にて開催され、中国・韓国・日本の学生約70名が参加した。今回のテーマは、「日中韓の青年達の“ネットにつながる市民”文化とその正しい発展の方向を探る」で、ソウル市内の国際会議場、また天安の国立中央修練院を舞台に、講演をはさんでグループに分かれての討論が、熱心に行われた。日本からは、学習院、慶応義塾、電機通信、獨協、日本女子、法政、明治学院、横浜市立、立教、早稲田の各大学、そして、韓国の全南大の大学院留学中の1名を併せた18名の学生が参加した。

心を開く

大学3年 森野 舞

今、私は写真を見ている。6日間を共に過ごし、共に語り合った参加者との様々な瞬間が写し出されている写真を。

始まったばかりの頃の私の表情は、少しこわばっている。なぜなら、韓国語と中国語が話せないため、私のコミュニケーションの手段は、英語に限られている訳だが、その英語も満足に話せない、聞き取れない事が原因で、うまくコミュニケーションをとることが出来ずに、一人仲間の輪から取り残されていたからだ。私と一緒にいてもろくに言葉が通じないから相手はつまらないと思っているに違いないと決め付け、自らその輪から遠ざかるようにしていた。

しかしながら、次第に写真の中の私は、ほんの数日前に見られていた堅苦しい表情がなくなっていた。そのきっかけとなったのは、一つ目は高橋久子氏が出発の前に、私達に話して下さったことを、ふと思い出したからだ。「自分の心を開け放ちましょう」、この言葉は、今回のフォーラムを通じて励みになった。

言葉に堪能か堪能でないかは問題とならない。一番大切なのは、思い切って心を開いてみる事。言葉が通じなくても、笑顔でいるだけで、相手は近づいて来てくれる。そのお陰で、何人もの友達と、深い交流を持つことが出来た。

二つ目は文化交流の発表にあった。それまでの日本人の参加者との関係も、更に深いものになっていたから、私達は心から楽しみながら、自国の文化を披露し、その発表に強く感銘を受けた何人かの韓国人や中国人から、会話を求められるようになり、更なる交流の糸口



●日本からのグループ

となった。それ以降は努力して積極的にコミュニケーションを図ろうと言う考えなどは消え、韓国人・中国人との会話を、残された時間の中で最大限持ちたいという感情が、自然に心に湧き上がったし、何よりこの時間が、今までの人生の中で、一番輝かしく思えた。大げさかもしれないが、こんなに喜ばしい感情が自分にも芽生えた事が、大変驚きであり誇らしかった。

6日間の短い期間に全世界人口のほんの一握り分しかあたらぬ70人による国際交流は、つたない言語ながらもお互いが心を開き合うことによって、参加者の絆がひとつに結ばれた。

少なくとも私にとっては、今回のフォーラムは自分の人生観を変えるものとなった。「心を開け放つこと」は、国際交流に限って言えるものではなく、身近な関係にも言えるものだ。

以前の私の対人関係のスタンスが変わったことは、未来の私に良い意味で大きく影響するだろう。

通訳の経験

韓国 大学生 ゴ・ヒョンミン

いつも他人より優れなければならないと言う、強迫観念のせいだろうか、実は自分をもっと発展させるために参加した東北アジア学生フォーラムは、とても大きな意味で心に残りました。私はコーディネーターとして準備会からずっと忙しく働きました。しかし振り返ってみると、翻訳で遅くまで頑張ったということも、今は懐かしい思い出になりました。その結果のフォーラム資料の本を見ると、参加者としての誇りを感じます。

中国人のチファイと話し合ったことが心に残りました。チファイは中国の最高名門大学を卒業してから、修士課程を準備している人です。韓国とは比べられないほどの難しい中国の入学試験を通して、そのような学歴を持っていることに驚きましたが、もっと驚いたのは彼の心でした。私が彼に軽い気持ちで「将来中国での成功は間違いないですね」と言ったら、



●すっかり仲良くなった日中韓のフォーラム参加者

彼は「私はダメです。全世界の人材と比べたら、私は全く何もないです」と答えました。彼は謙遜な態度で言ってくれましたが、私は一寸恥ずかしくなりました。彼の目は、13億の中国のみならず、アジアでもなく、既に世界に向いていました。彼の態度は、私が今まで会った中国人とは、はっきりと違いました。今度のフォーラムでチファイのような偉い人たちと色々な時間を持てた事を、一番嬉しく思いました。

同胞として迎えられて

大学3年 金 郁美

私が今回のフォーラムで特に感じた事は二つ有ります。

第一に、小さい事であっても行動する事が大切だと言う事です。討論の中で他の事に関してですが、このような言葉を耳にしました。私は日韓中の三カ国の関係が友好的になる事を、幼い頃から望んでいました。それは私が在日コリアンであり、様々な経験をしている事に由来しています。高校生の時に、日本の学生と交流会を行った事がありますが、今回のようなフォーラムに参加するのは初めてでした。確かに私達約70人の学生が討論をして友好的になっても、それがすぐ三カ国の関係の改善に繋がるとは言い難いです。しかし行動を起こさなければ、何も始まりません。小さな事であっても、積み重なれば大きなものになり得るし、そこからまた何かが生まれることもあります。その様な意味で、フォーラムに参加したことは、三カ国の将来のために、私が何

かをする為への、大きな第一歩になったと思います。

第二に、国籍の壁は私達にとってさほど大きな問題ではないと言う事です。考え方に差が生じて葛藤が生まれるのは、国籍の違いによるものではありません。対話をしないために、相互理解が出来ていない事が原因です。その証拠に、初対面の私達は、たった6日間の間に、本当の親友のように仲を深める事が出来ました。理解をするためには、まずは対話が必要であり、お互いを理解しようとする気持ちが大切だと言うことを、私は強く感じました。

また、在日コリアンである私を、暖かく同胞として迎えてくれた韓国人の方々に、私は本当に心から感謝をしています。韓国籍でない私を『国籍は関係ない。同じコリアンではないか』とって歓迎してくれました。初めて訪問した祖国の暖かさ、本当に良くして下さったホームステイ先の方々、初めて出来た韓国人の親友達を、私は一生忘れないと思います。



第3回訪中レポート

中国国際交流協会の招きで、2006年10月15日～21日の1週間、第3回のIC訪中団は北京、河南省、上海を訪問した。訪中団は、榊たか子氏（IC日本協会副会長、日中友好さいたま市民会議会長）を団長に、加藤憲一（あしがら総研代表）、下崎紀子（春日部市民生委員）、高橋久子（IC日本協会理事）、森文男（イフ・コーポレーション代表）、長野清志（IC日本協会専務理事）の6名で編成された。

調和の取れた社会に向かって

高橋 久子

各地で大変な歓迎を受けたが、全行程に同行しお世話下さった交流協会の文徳盛さんが、なめらかな日本語で、どこへ行っても気持ち良くお世話して下さい、合間々々に、現在の政治的、社会的状況などを、細かくお話して下さい、細かい気配りの中での旅をすることが出来た。北京では2年後のオリンピックに向けて、古い住宅があらちちらで取り壊され、マンションや競技場へと工事の真っ最中。東京オリンピックの頃の東京が思い起こされる。河南省・鄭州の古い歴史を示す博物館では、この国の歴史の深さ、文化の重厚さに圧倒された。上海ではきらびやかなネオンサインと、古い建造物の対比に驚かされ、どこの都市でも表側の豪華な歓迎の後、裏通りに一步入ると、賑やかな雑踏の中に踏み込んでしまう。車や自転車が波のように押し寄せ、通りはぎっしりと人で埋まり、そのエネルギー（活力）には驚くばかり。

どこの市でも、歓迎してくれるリーダー達は、今中国が“調和の取れた社会”を目指している事を、力説していた。飛躍的な経済発展に、環境整備や農

村政策などが追いつかない事や、一人っ子政策などで教育制度の裏側にある、色々な問題について模索している姿が垣間見えてくる。目標をはっきりと掲げて、努力する姿はとても印象的で、これからの中国の底力を見せ付けられたように思う。国は違っても、同じような問題をかかえる中国と日本、もっともっとお互いに協力していくべきではないかと思う旅であった。



●中国国際交流協会の皆さんから歓迎を受けた日本のIC代表団

変化の時

森 文男

訪中の際感じた事は、過去長年にわたり中国と民間レベルで友好関係を築いて来た国際IC日本協会(MRA)の信頼の大きさに驚かされた事です。またこのIC(MRA)のビジョンを信じ、中国の人たちに数多くの貢献をし続けてきた、榊さん達の活躍があつてこそ、今回のような旅が出来た事を、心から感謝しております。

国を挙げて男女平等、教育、医療、健康、住宅などに取り組んでいるようです。どの公園にも、お年寄りのための運動器具が設置され、お年寄りが多く集まり、各自で運動をしている光景を、あちらこちらで見ることが出来ました。太極拳をしている年配の方も見かけましたが、健康に対する意識が高いようです。

現地の方々の意見を聞かせてもらって、日本でマスメディアに影響され、偏見の目で見えていた自分に気が付きました。小さな出来事でも中国全土の動きのように印象付ける、日本のメディアという一つの角度から伝えていることを、そのまま真に受けてはいけないことを痛感しました。

中国の人たちが声を揃えて言う事は、「日本と中国が力を合わせなければならない。中国は日本を必要とし、日本も中国が必要だろう、そしてアジアを纏めなければならない」でした。

お互いに話し合いをする必要があると思います。次世代の子供達が、大変な思いをしないでも良いように交流を深め、過去の痛みから解放されるよう、大人達の手助けが必要だと思います。

一人っ子政策に関して、20代の既婚の女性に問いかけたところ、「中国では共稼ぎが殆どで、多くの方は一人っ子の方が、子供の教育にお金をかけられるからその方が好ましい」と言いました。鍵っ子も普通らしく、そのためコンビニの弁当もよく売れているようでした。

訪中最後の晩餐の席の中国の方の言葉で「子供を大切にすることは、未来を大切にすること、お年寄りを大切にすることは、自分を大切にすることだ」という言葉が心に強く残りました。

IC訪中国に加わって

下崎 紀子

福祉関係を中心に述べさせていただきますが、2日目の中国婦人連合会訪問は、特に期待しておりました。人口の多い中国も現在高齢化社会に入り、人口の11%と増加の一途をたどっています。職員の女性達も活動的で、女性の社会参加への強さを感じました。午後の高齢者委員会訪問でも、高齢者問題の話が続き、最近では中国でも核家族の所帯が増え、65歳以上のお年寄りもいずれ施設に入所される傾向のようです。

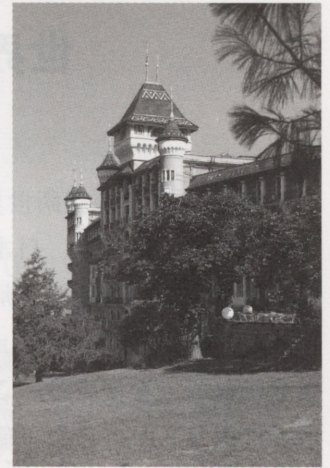
3日目に訪問した月壇中学には、先般安倍総理夫人も来訪されましたが、日本語教育に特に力を入れている学校で、日本との関係の改善により、減っていた応募学生の回復を期待しているようでした。日本との姉妹校も多いとの事で、時間があれば子供達と実際に話をしてみたかったと思いました。5日目には敬老院を見学しました。古い建物で暗い感じでしたが、赤ちゃんからお年寄りまで315名が居る施

設で、笑顔で手を握り合いました。施設訪問には慣れていた私も、思わず、涙、涙となりました。日本も同じ現状というものの、特に何も分からない子供達を見て、事情はともあれ両親が揃っていながら、児童の虐待問題が急激に増加するなど悲しい事です。

6日目には医療保健施設を見学しました。地域の小病院が成り立たず、高級病院化へと流れている事情は、日本も同じではないかと思えます。地域医療として医者は全体を担当しながら、入院・介護のために家庭を訪問し治療を行っているようでした。

5年振りに訪問した中国は町並み、ビル、自動車もその変わりようは激しく、目覚ましい発展の限りでした。一方、一般庶民の生活水準は如何なものでしょうか。その中でも女性の社会進出は以前にも増して素晴らしく、平凡な主婦の私も勇気づけられ、福祉関係の仕事や子供の問題などに、もっと頑張らねばと帰路の機中で強く思いながら帰国しました。

コー世界大会に参加して



第60回コー世界大会は、スイス・コーの「マウンテンハウス」で、7月6日-8月17日にわたって『個人の人格をたかめ清廉な世界の実現につなげるために』の総合テーマで開催された。

約1ヶ月半の中で、「奉仕の精神、責任感、リーダーシップ」、「改革のための手段を学ぶ」、芸術会議「現在の在り方を変革するために」、「世界経済における信頼と誠実性」、「クリーンで公正なアフリカを目指すための率直な対話」という5つの会議が開催され、世界各国から、人種、国籍、宗教、年齢等を異にする2,000名近くが参加した。日本からは芸術を通して世界の状況を少しでも良い方向に変えようという目的を持って、37ヶ国から250人が集まった芸術会議を中心に9名が参加した。

私にとってのコー

(財) 日本国際協力センター 高橋千恵

コーで過ごした3週間を振り返って、次の3つの理由からコーが私にとって、大切な場所であることを認識した。先ず「自分の人生について考えるのに、理想的な環境」である事。日頃の喧騒から離れて、山道や森を散策しながら瞑想したり、自分の来し方行く末に思いを馳せたりする事が出来る。自分の生き方を問い直す絶好の機会でもあった。

「旧知の友人に再会できる場所」でもある。1946年に、コーが国際会議場として誕生する直前の大修理にも参加したと言う年配者も意気盛んで、当時の興味深い話を聞かせてくれる。その多くは、ICのフルタイムとして、働いて来た人達である。いずれも知的で才能に溢れ、他の職業に就いていたら、大成功を修めていたはずの人材であるが、より良い世界を作ると言うコミットメントを貫くために、奉仕の人生を選んだ彼らに脱帽し、改めてチャレンジを受けるにいたった。

また「世界に出会える場所」であること。最後のアフリカ会議のときは、実に74ヶ国から450人の参加者が集まった。その中にはレバノンの若者もいた。当初の目的であった最初の会議が終わっても、イスラエルとの戦争が始まったせいで、故国に帰れなくなってしまったのだ。オーストラリアから参加したスーダン出身の若者は、3歳で両親と生き別れになって、12年もの間、難民キャンプで過ごしたという。コロンビアのジャーナリストが見せてくれたビデオでは、政府軍とゲリラの板ばさみになって、虐殺される村人の様子や、たとえ最後の一人になら

うとも、中立を守り通すという決意を語る人々の姿に、私達は言葉を失い、暫くは誰も立ち上がることが出来なかった。

故国のために何も出来ないと苛立ち焦るレバノン青年に対して、私はこう言って励ますのが精一杯だった。「せめて最高の場所に足止めされたと思って欲しい。ここには世界各地の希望が見えない状況下で、奇跡が起こるのを目撃した人達が沢山いる。将来優れた指導者になるための準備の積りで、いろんな話を聞いて何かを学び取って欲しい。憎しみや感情に流される事なく、正しい事を追求できるリーダーになれるように」。平和な日本に戻った今、私は悲惨な状況にいる人々のために祈り、彼らの痛みを共有しようと努力すると同時に、一体自分には何が出来るのかを問いつづけている。

コー滞在中は、日本人としての意識が高まっていく自分も感じていた。私がどこから来たのかを訪ねた、アフリカの小さな女の子は、「ジャパン」という私の答えに目を輝かせた。極東に位置する小さい国で、人的資源以外はあまり持たないにも拘らず、世界的な活躍を続けて来た母国に、誇らしい気持ちが生まれて来た。しかし、帰国してみると、余りに内向きのニュースや話題ばかりを耳にし、すっかり平和ボケして、世界から孤立しているのではないかという、危機感を抱きつつある。日本の加工貿易は、ひいては日本の生存は、世界平和の下に成り立っている事を肝に銘じて、常に世界に目と心を開いていたいものである。

世界中の人よ、折り紙を折ってみよう

小学校教諭 鈴木 恒美

今回は2度目の芸術世界大会への参加であった。マウンテンハウスは、日本から遠い所にありながら、なぜか自分の古里へ帰るような気持ちにさせてくれた。前回のワークショップでは、たった一枚の折り紙が「人を変える」ことに驚き、さっそく教育現場に取り入れてみた。確かに子供達が熱い思いで取り組み、チェンジしていく姿を目の当たりにした。たった一枚の折り紙。幼いころ親から教わって来たはずの折り紙。紙を折ることで無私の心になり、人間としての優しい思いやりが育っていくものと思われた。

今回ワークショップのメンバーは、墨のにおいをする、落ち着いた雰囲気の中で、「ツル」を折ったり、

書道を体験したりしながら平和を考えた。国が違っていても気持ちを1つにする事が出来た。折り紙を折れば、誰でも優しくなれる。幼い頃を思い出させる。現にワークショップの部屋に、一日中子供達や若者達が入り出して、折り紙を折りに来ている。ただ単に「折れる喜び」だけでなく、気持ちが落ち着くのである。ワークショップに参加した子供達が、生き生きしている姿は、何よりも嬉しかった。小さな折り紙には「人の心をチェンジするパワー」がひそんでいることを、更に確信することが出来た。日本の子供達と世界の子供達。ワークショップのメンバーと世界の人々が、「優しい思いやりを運ぶ」折り紙を通して、手を結んで欲しいと強く願う。



●それぞれ平和への願いを筆に込めて



●ワークショップの参加者たちと



●コー駅で日本からの参加者と台湾とポーランドの友人たち



●一所懸命にツルを折るワークショップの参加者たち

◇◇◇ IC ニュース ◇◇◇

■第 10 回ミニ HOHO を、福岡で開催

去る 3 月 3 日（土）から 4 日（日）まで福岡山の上ホテルにて、第 10 回ミニ HOHO が開催され福岡を初めとした、九州各県、東京、静岡、神戸、京都等から計 47 名が参加しました。橋本徹国際 IC 日本協会会長による「私の人生と転換点」のテーマでの講演から始まりました。小さなグループに分かれてのストーリーテリングでは、「人生の転換点」をテーマに、家族、出会い、成功や失敗、・・・等々について夫々の人生を振り返りました。初めての参加者も 15 名余ありました。短い期間にも拘わらず打ち解けあい温かい関係を築くことが出来ました。

■ジェフリー・クレイグ氏が来日

ご家族と共に 1982 年から 4 年半日本に滞在され IC のためにご活躍頂いたジェフリー・クレイグさん（イギリス、IC 専従）が、オーストラリアでの IC 国際会議への参加、そしてソロモン諸島とパプアニューギニアでの IC 活動を終えた後、来る 3 月 2 日から 10 日まで日本に滞在されました。福岡での第 10 回ミニ HOHO に参加された後、多くの昔からの友人や新しい友人に会われました。

■インドと日本の共催で「アジアプラトー」で国際会議を開催

（参加者募集）

本年の 11 月 23 日（金）～ 27 日（火）まで、インドのマハラシュトラ州・パンチガーニにある IC センター「アジアプラトー」でインド IC 協会と共催で国際会議を開催します。テーマは、「グローバル化する世界におけるアジアの役割—新しいリーダーシップモデルに求められる信頼と高潔さ」です。この会議は、スイス・コーの IC 世界会議場で 30 年以上にわたって開催されてきたコー・イニシアティヴス・フォー・ビジネス（ICB、元コー産業人会議）の一環として開催されます。2005 年より、この会議がスイス・コーの IC 世界会議場とインドの IC 会議場で隔年毎に開かれることになりましたが、今回は、このインドでの会議を国際 IC 日本協会と共催することとなりました。ディスカッションの主なテーマは次に記したものです。

グローバリゼーションの流れの中で

貧富の差を縮めることが可能だろうか？／企業の社会的責任に対する影響は？／信頼性という土壌がそこなわれないだろうか？／環境問題を考える

日本を初めとした、東北アジアから 50 名の参加を予定しております。詳細をお知りになりたい方は IC の事務局までご連絡ください。

尚、「アジアプラトー」のセンターでは、一年を通して、産業人セミナー、青年会議、ファミリーを対象にした会議等々が開かれています。

■第 30 回 IC 国際会議

テーマ「いつも誰かのために、いつか誰かのために—共に生きる世界と私—」

本年も三浦海岸のマホロバ・マインズを会場に IC 国際会議が 6 月 15 日(金)～17 日(日)にかけて開催されます。今回もアクション・フォー・ライフ (IC の青年育成国際プログラム) の修了生を初めとした海外からのゲストや日本在住の留学生等、多彩な参加者が集まり、国際的な雰囲気の中、又、世代を超えて心を開いた話し合いがもたれる予定です。多くの素晴らしい出会いを期待しています。是非ご参加ください。案内状が出来次第、お送りさせていただきます。

■ IC インターナショナルの新会長にモハメッド・サヌーン氏が就任

3 年間にわたり IC インターナショナルの会長を務めてきた、コルネリオ・ソマルガ氏 (元国際赤十字総裁) に代わり、本年 1 月から、アルジェリアのベテラン外交官であったモハメッド・サヌーン氏が新会長に就任しました。サヌーン氏は、アフリカの開発問題に関するアナン前国連事務総長のスペシャルアドバイザーを務めたのを初め、4 度にわたり、アルジェリアの大使として赴任すると共に、アフリカ統一機構 (OAU)、並びに、アラブ・リーグの副事務総長等を歴任しました。

訃 報

弊協会の理事を務めておられた中島秀夫氏が、去る 1 月 28 日に急性心不全で逝去されました。(享年 80 才) MRA (現 IC) の創始者であるフランク・ブックマン博士と共に世界各国で活躍された後、アジア国会議員連合の事務局長として、又、その後は、産業界で経営にも携われる等多方面で活躍されました。2 月 3 日の告別式には、アメリカ大統領の特別補佐官を務められたリチャード・アレンご夫妻もアメリカから駆けつけられました。「秀夫さんは、真の理想主義者として、日米相互理解に大きく貢献されました。同時に私たちの人生をも豊かにしてくれました」と何時も変わらぬ友情を示された中島さんを偲ばれて弔辞を読まれました。ここに心よりご冥福をお祈りいたします。

編集後記

ニュースの発行が遅れたことをお詫びいたします。今後、スムーズにニュースをお届けできるよう、現在、編集の体勢を構築中です。本機関紙に関しましてご意見等がございましたら、どうぞ IC 事務局までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

編集委員：高橋 久子、中嶋 邦子、長野 清志 編集協力：高橋 伸明